巻頭言

月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ(3)
― 新しいスタートへ ―

浜口順子

雑誌作りという経験

『幼児の教育』は次号から月刊誌という形を一新することになりました。その転換にあたり、これまでの雑誌作りで大切にしてきたことの一端を振り返らせていただこうと思います。

編集という仕事が思いがけず私に降りかかったのは、二〇〇四（平成十六）年でした。前任の田代和美先生からは、とにかく作る人が作りたい雑誌を作るべきだという原則を示していただきました。附属幼稚園教諭スタッフとの編集会議では、その雰囲気の中から見よう見まねで、まさに環境を通して感受性と模倣（ミメーシス）によって、慣れない仕事に着手しました。そして知らない間に自然と、保育に近い人、遠い人、両方の執筆者から文章をいただき、「子ども」や「保育」を巡る日常性をふと振り

返り、何かに新しく気づくきっかけになるような雑誌を目指していました。あるものは論理によってうなずかせ、あるものは感覚に訴えられ、そしてあるものは無関係に見える話題から新しい知の血脈が通い始めるような、この多様性が掲載論文には大切であろうということも編集上の原則となりました（この原則が、倉橋惣三の目指したことと重なることは後でわかりました）。奥付（最終ページ）に私の名前が出た最初の号（本誌第一〇三巻第九号）で、雑誌の「雑」という字にかけて、「種々さまざまなものが交じり合うことは、『不純』という軽蔑の意味づけに直結しがちであることを思い起こし、『雑』の意義を問い直したい」と書いたのも、そういう意味合いでした。

津守真先生が本誌の編集を五十六年前に引き継がれる直前に、倉橋惣三の自宅に編集協力委員が集まった際、「幼児教育の根本論というと、深遠な理論を連想するかもしれないが、幼児教育は生活に身近なものであって、読者にふわりとした感じを与える記事が必要であることが話題になった」といいます（第一〇〇巻第一号 p. 9）。実践現場から直送される保育論に息づく生活感はもちろんですが、研究者が文献やデータをもとに論じた学術的な文章であっても、そこで追究されるものが子どもの世界や保育者の姿であれば、どこか「ふわり」とした雰囲気を漂わすものが少なくありません。この「ふわり」感は、掲載される文章の内容だけでなく、表紙やカット、誌面構成やレイアウトにおいても表れるよう、編集担当者たちが創意工夫してきました。

「編集後記」欄があること

「創刊一一〇年企画アーカイブズ集」は今回「編集後記」がテーマになっています。この編集後記を書くという作業ですが、編集担当者が交代で担当する場合もあり、私も初めのうちはそうしていたのですが、最近は毎号自分で書くのがルーティンになりました。それでも、実は、なぜ編集後記というものが必要なのかはまだよくわからないでいます。

舞台後の出演者の挨拶や映画のＤＶＤのメイキング映像などは、鑑賞者が感動の余韻に耽りたい思いに冷水をかける面もあるかもしれませんが、一方で「演じ手にも別の素顔があり作り手には舞台裏がある」ということを改めて感じることで、なお一層、表現作品への興味が深まるという効果があるのではないでしょうか。いろいろな雑誌の編集後記を見回すと、誌面作り中のエピソードが書いてあるもの、その時期に世間を騒がせている事柄や事件についてのコメント、編集者の近辺で起こったことへの雑感などなど一様ではありません。それでも、それぞれの雑誌の背後には人間の顔があり作り手の思いがこもっていることを肌身で感じられるのは共通で、おもしろいものだと思います。

私は大学教員をしていますが、保育学関連の授業で教科書を指定して使っていた時

のこと、学生から「この教科書に書いてあることは全部正しいのですか」と質問されて、ひどく驚いた経験があります。「教科書」というと正しい事実しか書かれていないという感覚、これは小学校からの学校教育の中で徹底的にたたき込まれてくる観念に違いありません。教科書に限らず、新聞・雑誌・インターネット情報などの文字と出合うことは、それらを書き記す人間とも出会っていることであり、それは同時に「正しい」という言葉の相対性から逃げられないということでもあります。バーチャルな距離感に慣れ過ぎず、間違いもすれば傷つきもする人間が作り手であること、その体温を伝えたり感じようとする手間を、情報媒体の作り手と読み手は互いに惜しんではならないのだと思います。

「（保育の）現場の人は保育の技術面の材料を欲しがる」が、「保育の根本を理解させ、その精神を伝えることを方針とすること」が本誌の独自の立場であると倉橋は話していたそうです（先の津守先生の文章から）。及ばずながら私たちも、この姿勢は変わらず貫かなければならないと考えます。それはもとより「正しい」保育を読者に教えることとは全く違うはずです。作る人と読む人がそれぞれに考え、倉橋がわれわれに「足りない」と厳しく警告し続けた「根本考察」に向けて対話する場として、『幼児の教育』が少しでも貢献できるよう歩み続けていきたいと思います。

（お茶の水女子大学大学院准教授）